

5. 学生スタッフのボランティア企画・広報企画

ボランティア・NPO 活動センターでは、地域の様々な団体や行政と連携し、学生の学びだけでなく地域貢献にもつながる活動に取り組んでいます。ボランティアに関心はあるけれども参加経験が少ない学生達へ向けては、地域とつながる活動のきっかけとなるような体験企画を学生スタッフを中心となって企画しています。また、学生スタッフ自身も、地域の団体や行政からの協力依頼に対し積極的に関わり、ボランティア活動の裾野を広げるように心がけています。

また、学内においてもボランティアや社会課題を広く学生に知ってもらうための広報や啓発活動も学生スタッフが主体となって取り組んでいます。

2023年度は地域でのイベントの多くが再開され、龍谷祭等の学内のイベントも活発に実施されました。このような状況において、コロナ禍で入学してきた学生スタッフは、自分たちなりに何ができるか試行錯誤しながら、動画作成や SNS を利用した情報発信や企画運営に努めました。

事業名	大津祭 ボランティア協力
日時	2023年10月8日(日) 7時15分～18時00分
場所	大津市内中央街
参加人数	41名(うち学生スタッフ21名)
企画メンバー (学生スタッフ)	倉田若菜(社会2) 蔵本千優(社会2) 関塚美帆(社会2) 土屋朝揮(農学2) 橋本湧生(社会2) 北野綺音(社会1) 西野太洋(農学1) 橋本怜亜(社会1)

1. 経緯・目的

- 新型コロナウイルスの影響で2年間開催されなかった大津祭が昨年より再開された。昨年に引き続き地域の伝統文化であり、国指定重要無形民俗文化財に指定の歴史ある大津祭を龍大生と共に盛り上げ、伝統文化継承の重要性についての理解を深めてもらう。
- 昨年大津祭に参加して感じた、伝統的な祭りに参加することの楽しさに加え、私達若者も伝統文化継承の当事者になることができるということをより多くの龍大生に伝える。

2. 概要

①広報

日時：7月11日(火)～8月5日(土)

内容：チラシ配り、掲示板、ポスター、授業広報
チラシ配布枚数：約1300枚

②お囃子演奏

日時：7月12日(水)

内容：大津祭曳山連盟の方に大学に来てもらい、お囃子実演をしてもらった。

場所：食堂前のステージ

③事前勉強会

日時：8月9日(水) 14:00～16:00

場所：大津祭曳山展示館

内容：曳山展示館の見学と大津祭曳山連盟の方からお話を聴き、大津祭について学んだ。

参加人数：12名(うち学生スタッフ3名)

④参加者交流会

日時：9月15日(金) 15:00～16:30

場所：龍谷大学瀬田キャンパスプレゼンテーション室

内容：ボランティア参加者同士の交流、サークル「雅」の発表や勉強会で学んだことを通して、大津祭について知ってもらった。

参加人数：36名(うち学生スタッフ19名)

⑤事前説明会(曳き手)

日時：9月23日(土) 14:00～15:00

場所：大津中央市民センター

内容：曳き手ボランティアの説明会への参加

⑥事前説明会

日時：10月1日（日）11：00～12：00

場所：大津中央市民センター

内容：一般ボランティアの説明会への参加

⑦山建て・曳き初め

日時：10月1日（日）14：00～16：00

場所：大津市内中心街（中央学区）

内容：山建ての見学、曳き初めの体験

参加人数：20名（うち学生スタッフ11名）

⑧ちまきまきボランティア

日時：9月23日（日）～10月1日（日）

場所：大津祭曳山展示館

活動内容：お祭当日に配られるちまきの周りの飾りつけ

参加人数：10名（うち学生スタッフ10名）

⑨宵宮ボランティア

日時：10月7日（土）12：00～21：00

場所：大津市内中心街

活動内容：昼食会場準備、宵宮曳き、本部補助

参加人数：9名（うち学生スタッフ8名）

⑩本祭

日時：10月8日（日）7：00～18：00

場所：大津市内中央街

活動内容：神功皇后山の曳き手、巡行路の警備、荷物の搬入やカラーコーンの設置などの本部補助



3. 参加者の声・得られた効果など

○交流会

- ・大津祭りの歴史についても知ることができ、当日メンバーと交流することができ、当日の不安も少なくなり参加してよかった。
- ・サークル「雅」のお話で、大津祭の成り立ちや地元の人がとても大切にしている祭りだということを知れた。

○本祭

- ・大津祭りという伝統的な行事に地元の人ではない私に関わることが貴重な体験だと感じた。実際

に参加してみて誰もが何十年と通い詰める魅力のあるお祭りだと実感した。

- ・最初は大津祭の事を全く知らなかったけれど、このボランティアを通して祭りについての知識を得たり、知識を得た上で実際の曳山を近くで見ることができて、とても勉強になり楽しかった。
- ・曳手として大津祭りに参加し、非常に貴重な経験ができ、充実した一日だったのでまた参加したいと思った。
- ・ただ参加するだけでなく、同じ班の人や、観覧客とコミュニケーションをとることができて楽しかった。他の曳山の方に曳山について色々話してもらい、楽しめただけではなく勉強にもなった。
- ・大津祭当日の満足度が全員満足・大変満足だったこと（下記表）から、伝統的な祭りに参加することの楽しさを伝えられたのではないかと思う。また、多くの方が来年の大津祭にも参加したいと回答し、大津祭について興味を持ってもらい、伝統文化継承の担い手を意識するきっかけになったと考える。

ボランティア参加者へのアンケート（一部抜粋）

大津祭当日に参加しての満足度	
○大変満足	75.8%
○満足	24.2%
○どちらとも言えない	0%
○不満	0%
○大変不満	0%
来年も参加したいと思いますか？	
○はい	93.9%
○いいえ	6.1%

4. 学んだこと・今後の課題

- ・深草含めて多くの学生スタッフにチラシ配りなどの広報に協力してもらい、多くの学生が大津祭を広報できた。
- ・交流会でサークル「雅」に、文化財を守る担い手になってほしいという思いを込めて、大津祭について説明してもらい、ボランティア参加者がより深く大津祭について学べたことや伝統文化継承の重要性について知れたことが良かった。
- ・お囃子実演の事前広報や交流会のリハーサルなどを行なうことができ、去年の反省を活かしながら企画を進めることができた。
- ・企画を通して定期的にミーティングを行なうこと

ができ、出席率もよく情報共有がスムーズだった。しかし、ちまきまきボランティアや宵宮ボランティアなどでは新スタッフに対する説明が不十分のまま進んでしまい、全員が理解をしたうえで企画を進めていきたいと感じた。

- ・ちまきまきボランティアと宵宮ボランティアを今年初めて行なったが、一般学生をうまく巻き込むことが出来なかった。一般学生がもっと参加しやすい形を地域の方々と話す必要があると感じた。また、宵宮ボランティアなどは本祭の前日なので、本祭に参加しない学生スタッフにももっと早い段階でボランティア参加を呼びかけることで参加を促したい。
- ・ボランティア参加者に対する連絡が遅くなってし

まい不安を与えてしまった。いつまでに連絡をするかを事前に伝えておくことや、早めに情報を共有することが必要だと感じた。

- ・本祭の休憩中に学生スタッフ同士で固まっていたことや、企画メンバーも事前勉強会や山建て・曳き初めなどで一般学生にあまり声かけられなかったことから、一般学生との交流が少ないと感じた。一般学生が、安心してボランティアに参加できるように手助する学生スタッフの役割を果たせるよう、自分たちから声をかけて話すなどの交流が必要だと感じた。

〈報告者：土屋 朝揮〉

事業名	深草ふれあいプラザ2023への協力			
活動日程	2023年10月15日（日）午前8時40分～午後4時30分			
活動場所	藤森神社、藤の森公園			
参加人数	61名（企画メンバー13名含む）			
企画メンバー	岡 智浩（文学4） 加藤秀大（経済3） 佐藤美月（文学1） 土田花実（心理1）	鄭 叡智（国際4） 掛川大輔（経済3） 田島優芽（政策1）	神月麻伽（文学3） 和田晴空（文学2） 平川育海（政策1）	馬場康世（文学3） 兒嶋 愛（政策2） 田中あかり（心理1）

1. 経緯・目的

2012年から2019年まで深草ふれあいプラザ（以下ふれプラ）において、ボランティア・NPO活動センター（以下ボラセン）では地域と協力し、ボラセン紹介ブースや子ども遊びブースを出展してきた。2020年以降はコロナ禍でふれプラ自体の対面開催が中止となった。2021年にはオンラインでのふれプラが再開され、ボラセンも有志で動画出展という形で協力した。そして2023年、対面でのふれプラが再開されることとなり、地域からお声掛けをいただき実施する事となった。

○目的

- ・ふれプラは、地域の方々と交流することで世代間や地域間の結びを深めることを目的としたイベントである。このイベントに参加することで龍大生に深草地域の文化や歴史を知ってもらう。
- ・ボラセンの紹介ブースを設けて、地域の方にボラセンについて知ってもらう。

- ・今回参加するすべての学生にボランティアの楽しさを感じてもらい、今後ボランティアをするきっかけづくりを目的とした運営を目指す。
- ・ブースに来たすべての人達に、来年もふれプラに来たいと思ってもらえるような思い出を作る。

2. 概要

○事前説明会（10月6日（金）17：00～18：30）

○前日準備（10月14日（土）10：00～12：30）

※コア（10名）のみ参加

○ふれプラ当日（10月15日（日）8：40～16：30）

内容

①ボラセン紹介ブース運営

→ボラセン概要、龍祭展示・模擬店、学生スタッフ企画（龍谷キッズふれあいパーク）の紹介

②子ども遊びブース運営

→ゲーム：輪投げ 工作：お面と風車作り体験

③ふれプラ全体運営サポート

→飲み物ブースの補助、行列整理、舞台設営補

助、着ぐるみ、ゴミ分別ブース運営、ビンゴ
大会運営補助、全体の片付けなど

広報手段

チラシ、SNS（9月12日（火）～9月26日（火））

3. 参加者の声・得られた効果など

ふれプラ終了後、藤森神社参集殿にてボランティア参加者全員で振り返りをおこない、Google フォームにてアンケートを取った。

○アンケート結果（48名、5が最高評価）

- ①ボランティア活動全体を通じた満足度
5（28名）、4（14名）、3（5名）、2（1名）
- ②地域の方と交流できたか
5（31名）、4（14名）、3（2名）、2（1名）
- ③今後もボランティアに参加したいか
5（44名）、4（3名）、3（1名）

○感想

- ・お祭りの雰囲気自体も久しぶりに感じられたのですごく楽しかった。運営側というすごく貴重な体験をすることができたので良かった。
- ・はじめましての仲間たちと協力する事や子どもたちを楽しませるといふ大変さを知り、それと同時にその楽しさも学べた。また機会があればボランティアをしてみたい。
- ・途中雨が降るといふハプニングもあったがそれ以上に地域の方々とは話すことができ、また子どもたちや親など幅広い世代の方々がお祭りに来ていただいて笑顔でお祭りを楽しんでくれる姿を見て達成感ややりがいを感じました。

○目的達成度

- ・龍大生に深草地域の事を知ってもらおう
→地域の方と交流できたという意見が多数寄せられていたため、その交流を通じて深草地域の事を知ってもらえたのではないかと考えられる。
- ・ボラセンの紹介ブースにて地域の人にボラセンの事を知ってもらえたか？
→ボラセン紹介について保護者の方が子どもと一緒にゲームや工作に参加していたため、紹介する機会が少なくあまりうまくいかなかった。
- ・今回参加した学生がボランティアの楽しさを感じてもらって今後の参加のきっかけになったか？
→ボランティアが楽しかった、満足しているなどの意見が多数寄せられており、また機会が

あればボランティアをしてみたいという意見もあり、目的を達成できていたのではないかと考えられる。

- ・ブースに来たすべての人達に来年もふれプラに来たいという思い出を作ってもらえたか。
→ボランティア側：今回の反省を次年度のふれプラにつなげたいという声があり、次回も参加したいという気持ちを持ってくれた人がいた。
- 参加者側：多くの子どもたちにゲームや工作のブースなどで楽しんでもらう事ができ、いい思い出を作ってもらう事ができた。

○得られた効果

- ・ボランティアを通して地域の人と関わることで達成感ややりがいを感じることができた人が多数いた。
- その結果から深草地域について知ってもらい、ボランティアの楽しさに気付いて今後の生活に活かしたい、またボランティア活動の参加をしようとしている人が多数いることが分かった。
- ・一部達成できていないところがあったが当初の目的も達成し、地域やボラセンの活動、またボランティアの楽しさを知ってもらいきっかけとなったことが得られた効果として挙げられる。

4. 学んだこと・今後の課題

○当日までの準備・役割分担・スケジュール

- ・個人に負担が集中しないように役割分担をすることで、全体への発信や指示など、積極的に動くきっかけとなった。
- ・役割ごとに閉鎖的になっている期間があり、サポートが必要な状態であることに気付いていなかったため、週に一回程度各担当が情報を共有できる場を設けるなどして、コア全員が全体を把握できる状態にするべきであった。
- ・スケジュールに関して、お面作成時に目標の個数に対して逆算ができていたため良かった。また to do リストを作成し、共有する事により直前の準備が進めやすくなった。
- ・広報の開始が予定よりも遅れてしまい一般の参加者が少なかったため、できるだけ早くチラシ作成をして広報期間を長くするべきだった。
- ・チラシ等に募集人数を書いていなかったが、想定以上に希望者が集まった時の事を視野に入れ、人数制限もあるという事を書いておくべき

だった。

- ・当日何が起こっても迅速に対応できるように早めに何事も完成させておき、最後に余裕を持って進められるようにしておくべきであった。

○事前説明会

- ・コア内の担当を明確にすることにより効率的に行動できたほか、下級生も質問がしやすくなったため、積極的に動いていた。
- ・最初から役割を明確にして当日のイメージを早めにつかんでおき、市役所の方々とも対面で話す機会をできるだけ多く設けるべきであった。
- ・各ゲームのマニュアルやシフトが事前説明会までにできていなかったため、事前説明会までに準備を完璧にし、参加者の当日までの不安を少しでもなくせるようにしておくべきであった。
- ・ゲームに関しても当日直前に変更する点があったため一度試しておくべきであった。

○ふれプラ当日

- ・60名弱と参加者が少し多いと感じていたが、当日参加者の方々にもお祭りを楽しんでもらう

にはこの人数がちょうどよかった。

- ・子どもブースに関して、統括をするコアが1名だったため、もう少し統括者を増やすべきであった。
- ・ビンゴ大会に関しては地域の方々の参加者がかなり多く、予定していたボランティアの人数ではうまく対応できなかったため、次年度は参加人数を想定してシフトを組むようにする。



〈報告者：加藤 秀大〉

事業名	第101回龍谷祭における展示・模擬店の出展（瀬田）		
日時	2023年10月28日（土）・10月29日（日）		
場所	【展示】2号館211, 212, 213教室 【模擬店】噴水前		
来場者数	【展示】315名【模擬店】616食（販売）		
企画メンバー （学生スタッフ）	【展示】 萩原千絵（社会2） 小野日楓（社会1）	蔵本千優（社会2） 池上寛悟（社会1）	関塚美帆（社会2） 造田睦己（先理1） 【模擬店】 木部美沙紀（社会2） 白川ひかる（社会2） 小橋未沙（社会2） 石河大翔（先理1） 西垣風太（先理1）

1. 経緯・目的

2022年の龍谷祭では、展示、模擬店共に多くの方に来場していただいた。去年に引き続き、今年も社会課題やボランティア・NPO活動センターについて知ってもらう機会にする。

展示では「私たちにできること」をテーマに、社会問題に関心を持ってもらえる展示作品や参加型コーナーを設け、地域貢献やボランティア活動の啓発につなげる。模擬店では、提供する際に国産の間伐材で作った樹恩割り箸を用いてその存在を知ってもらい、SDGsを身近なものと感じてもらおう。

展示・模擬店を通して、学内外関係なく龍谷祭に参加するすべての人々に対し、センターの認知度向上を目指す。

2. 概要

(1) 展示

テーマ：我らの我らによる我らのための滋賀
内容：

①ボランティア・NPO活動センターの紹介

- ・本やリユース傘の貸し出し
- ・学生スタッフの取り組み

班紹介

夏ボラ新聞（夏休みに参加したボランティア活動の紹介）

- ・センター事業の紹介
 - 国内体験プログラム（福島／徳島）
 - 東日本大震災復興支援ボランティア（宮城）
- ・学生スタッフ企画（大津祭）
- ・学生スタッフが取り組む防災対策ランキング（夏合宿でやった災害に関するワークを基にしたもの）

② MLGs（※）の各項目に関連した展示

- ・一部①を含む（MLGsと関連するセンター、学生スタッフの取り組みに関する紹介）
- ・リユース工作の作品紹介、学校の落としものについて（資源を大切にすることの大切さを伝える）
- ・参加型コーナー：ポッチャ体験、障がい者疑似体験など

(2) 模擬店

内容：水餃子

価格：3個入り300円

個数：2日間で616食

売上金：181,850円

収益：121,978円

利益の用途：学生スタッフの活動費



3. 参加者の声・得られた効果など

(1) 展示

今回は Google フォームを使用してアンケートを実施した（下記表）。多くの回答を得ることができなかったが、来場者に付箋に記入していただいた感想と上記のアンケート結果より瀬田らしい展示ができ、展示を行なった目的を達成できたと感じる。展示物の文字量を意識し、ポッチャ体験のみの教室をつくるなど、展示方法を工夫したことで内容が分かりやすいという声をいただいた。

展示来場者へのアンケート（一部抜粋）

展示の満足度はどれくらいでしたか？	
○非常に満足	55.6%
○満足	44.4%
○まあまあ満足	0%
○不満足	0%
○非常に不満足	0%



その他の感想は以下の通り。

- ・ポッチャは聞いたことはあったけれど、どんなものか知らなかったし、楽しかった（本学学生）
- ・MLGsにつながるボランティアも一緒に展示することで、どのような取り組みがあるのか、自分も力になれることがあるということを示すことができていると思います。（本学卒業生）
- ・大津祭の楽しさ、大切さ、継承する人がいるという感謝を感じた。（本学学生）
- ・福島と宮城の展示を見て勉強になった。（回答者不明）

(2) 模擬店

- ・水餃子はすぐ提供できるため、お客さんを待たせず、すぐに届けることができ良かった。回転率が良かったから今回の売り上げにつながったと思

う。

- ・水餃子がおいしいと聞いて買いに来てくれた人がいて嬉しかった。
- ・学生スタッフが協力して来場者に宣伝をしたことで、想定を上回る個数を販売することができた。しかし、樹恩割り箸の宣伝が上手くいかない部分もあったため、SDGsの認知度をあまり向上できなかった。

4. 学んだこと・今後の課題

(1) 展示

- ・アンケートに Google フォームを使用したのが、回答者が少なかった。今後は紙を用いたアンケートを準備したい。
- ・展示教室を事前に下見しておいたので、前日準備をスムーズに進めることができた。その一方で、展示教室が複数あり途中退出してしまう来場者がいたため、今後は最後まで見てもらえるような誘導ができる展示にする。
- ・完成予定日を設定して準備を進めたにもかかわらず、完成が後ろに押ししてしまった。何曜日の何限に何をつくるかを、予め決めた方が計画通りに準備を進めることができるのではないかという意見があった。
- ・展示物製作リストを企画メンバー以外の学生スタッフに共有することが遅く、学生スタッフ全員が内容を把握できておらず、説明することが難しかった。共有してからは積極的な協力体制となったことから、誰が何をつくるか担当を決めてリス

トにまとめたり、ミーティングで完成した作品を順次紹介していくことが必要だと感じた。

(2) 模擬店

- ・もともと2日分を想定して購入物などを準備していたが、1日目に予想以上に売れたため、2日目に買い出しが必要になった。しかし当初の店舗に在庫がなく、探すのが大変だったので材料を多めに準備しておくべきだった。
- ・同様に樹恩割り箸も1日目で全て提供が終わったにも関わらず、2日目にも看板を使って宣伝をしてしまった。割り箸がなくなった場合、看板などの宣伝をどう対応するのか考えておくべきだった。
- ・事前に企画メンバーが準備時間の大きな流れを確かめたことで、当日搬入や店舗準備の指示が上手くいった。そのため順調に進み、営業時間に間に合った。

※ MLGs とは

マザーレイクゴールズ (Mother Lake Goals, MLGs) は、「琵琶湖」を切り口とした2030年の持続可能社会へ向けた目標 (ゴール)。MLGs は、琵琶湖版の SDGs として、2030年の環境と経済・社会活動をつなぐ健全な循環の構築に向け、琵琶湖を切り口として独自に13のゴールを設定している。

〈報告者:萩原 千絵 (展示), 木部 美沙紀 (模擬店)〉

事業名	第101回龍谷祭における展示・模擬店の出展（深草）			
活動日程	2023年11月3日（金）～11月5日（日）			
活動場所	深草キャンパス22号館305教室（展示） 顕真館前（模擬店）			
来場者人数／販売数	展示：約600名／模擬店：847食			
企画メンバー（学生スタッフ）	〔展示〕 喜多真央（文学4） 山下陽菜乃（文学3） 富銅柊介（文学3） 長峰拓未（経営3） 小倉未椰（経営3） 松田理莉緒（経済2） 小窪真澄（法学2） 西林勇貴（政策2） 佐藤美月（文学1） 村山結子（文学1） 三嶋千桜（文学1） 海山空澄（法学1） 松村侑祐（政策1） 小椋友里圭（国際1） 二見竜午（国際1） 〔模擬店〕 井関萌乃（文学4） 千葉圭喜（文学4） 馬越友梨（文学3） 太田早紀（経済3） 榎海斗（法学3） 長堂佑志（法学3） 齋田優斗（法学2） 内田美羽（国際2） 黒川朋生（文学1） 岡崎祐太（経済1） 和田健伸（経済1） 内林克樹（経済1） 山中優鈴（法学1） 井狩咲希（政策1）			

1. 経緯・目的

ボランティア・NPO活動センターは、毎年、龍谷祭でボランティアに関する展示と模擬店に取り組んできた。今年は新型コロナウイルスによる規制も緩和され、昨年度よりも学生の活動の幅が広がり、様々なことにチャレンジできる機会が増えた。そこで、毎年多くの人々が来場する龍谷祭の場を活用して、本センターの認知度向上を目指し、来室者がボランティアにチャレンジする機会を掴んでほしいと考えた。以上のことから、今年度は以下の目的で第101回龍谷祭における展示と模擬店の出店に取り組んだ。

〔展示〕

展示での出展を通して、来場者の方にボランティアの魅力や社会問題に関する知識を発信し、それらに対する興味・関心を持ってもらうきっかけにしたいと考える。また、この展示を通じて、本学学生にボランティア・NPO活動センターを広報し、本センターの認知度向上につなげる。

〔模擬店〕

模擬店を出店し、本センターの認知度向上を図る。

2. 概要

■展示

『JRボラ線でぶらり途中下車』

今年度の展示では、電車をコンセプトに、災害・障がい者・環境・子ども・国際・高齢者・センター紹介の7つにブースを各駅に見立てて展示を行った。

展示内容としては、風緑やくらら庵、晴嵐みんなの食堂などのボランティア団体についての展示や、

南海トラフ地震や少子高齢化に伴う老老介護などの社会問題・現状に関する内容を展示した。また来場者の方に実際に当事者の気持ちを理解してもらうために、点字ブロックや車いす、ボッチャ体験をできるコーナーを設置した。

加えてこれまで学生スタッフが携わってきた企画を来場者に紹介するために、東日本大震災の体験学習プログラムの紹介や、深草ふれあいプラザで使用したお面や風車を作成できるコーナーも設けた。そして、出口付近には、ボランティア相談ブースを設置し、ボランティアに興味を持った方にボランティアを紹介できるようにした。



■模擬店

『ボラセン特製 鶏皮餃子』

内 容：鶏皮餃子

価 格：2個入り300円

個 数：847食（3日間合計）

売上金：254,100円

収 益：164,963円

※今回出た収益は学生スタッフの今後の活動資金とする。



3. 参加者の声・得られた効果など

■展示来場者の声

アンケートの抜粋は以下の通りである。

※今年度の龍谷祭では、紙でアンケートを実施した。

(1) 展示内容はどうでしたか？

- ・良かった：247名
- ・まあまあ：4名
- ・良くなかった：0名

(2) ボランティアや社会問題への理解は深まりましたか？

- ・深まった：215名
- ・まあまあ：36名
- ・深まらなかった：0名

(3) 感想

- ・子どもも楽しめるような工夫がされていて良かった。
- ・体験ブースでは、実際に実感がわいて勉強になった。
- ・電車をモチーフにした展示がユニークだった。
- ・自分自身もこれから積極的に社会問題について考えていきたいと思った。
- ・お面作り等の工作が楽しかった。

■模擬店購入者の声

- ・よく焼けていておいしかった。
- ・作っている方たちが元気そうでよい。

4. 学んだこと・今後の課題

■展示

【良かった点】

- ・展示のグループ分けを夏休み前に行なう等、全体

的に早い段階から動き出すことができた。

- ・電車をモチーフにして、改札や駅、切符などそれに関連した展示物を作ることで、子どもでも楽しむことができるようにした。
- ・様々なテーマのブースに分けたことで、より多くの来場者に興味を持ってもらえた。
- ・ブースごとにクイズや体験コーナーを設置したことによって、来場者の方が足を止めてくれることが多かった。
- ・ふれプラの工作コーナーを設置することで、多くの子どもが展示を楽しんでくれた。
- ・学生スタッフ全員で取り組むことができた。

【改善点】

- ・各ブースで、役割の負担が大きい人と少ない人の差があったので、役割を均等に振り分けられるようにする。
- ・展示マニュアルは共有していたが、実際にシフトに入っていた人が、来場者に説明しきれていなかったため、全体に対して呼び掛けを徹底すべきだった。
- ・龍祭期間中、学生スタッフルームにゴミが散乱していたので定期的に整理をするべきだった。
- ・シフトの役割の引継ぎができていない時があったので、きちんと引継ぎを徹底する。

■模擬店

【良かった点】

- ・当日の役割を細かくしておくことで大きな問題なく終えることができた。
- ・早い段階から準備をしておいたので余裕をもって当日を迎えることができた。
- ・決定事項や提出物などを全員で共有できていたので準備にミスがなかった。
- ・看板づくりや広報を全員でできてよかった。

【改善点】

- ・模擬店の目的であるセンターの認知度向上に関しては、当日の配布物が禁止になったため達成できなかった。そのため代案を考えるべきだった。
- ・誰がいくら立て替えているかはっきりとさせるため、金銭に関しては1番最初から担当者を決めておくべきだった。

〈報告者：西林 勇貴（展示）、鶴田 優斗（模擬店）〉

事業名	「防災・減災そなえパークの日」へのブース出展		
日時	2024年3月3日（日）10時00分～15時00分		
場所	びわこ文化公園 催し物広場		
参加人数	30名（うち学生スタッフ22名）		
企画メンバー （学生スタッフ）	中村あや（社会3） 木部美沙紀（社会2） 西野太洋（農学2）	成川雅妃（社会3） 蔵本千優（社会2） 西垣風太（先理2）	三枝亜伽莉（農学3） 萩原千絵（社会2） 細見恭大（社会2） 安田 心（先理2）

1. 経緯・目的

龍谷大学瀬田キャンパスのすぐ近くにある「びわこ文化公園」は地域の憩いの場であると同時に、地域防災の拠点でもある。その公園で楽しみながら自分の身は自分で守る自助力を身につけ、突然起こる災害に備える1日として「防災・減災そなえパーク」というイベントが毎年3月に開催され、幼い子どもから高齢の方まで参加している。

センター事業である東日本大震災関連のプログラムに参加した学生スタッフが中心となり、そこで学んだ「自然災害は他人事ではなく自分事である」ということを地域住民にも伝え、防災意識を高めてもらいたいと考えた。龍大生とこのイベントに訪れた地域住民との触れ合い、防災・減災について考える機会を作るためにブース出展を行なった。

2. 概要

(1) 企画メンバーの事前学習

日時：2024年1月27日（土）

場所：阿倍野防災センター訪問

(2) イベント当日

日時：2024年3月3日（日）9：00～16：00

場所：びわこ文化公園 催し物広場

内容：

①本センターの防災啓発ブース運営

- ・展示の出展：福島スタディツアーや東日本復興支援ボランティアでの学び、瀬田区域のハザードマップ紹介
- ・防災工作3種：A4の紙で作るお皿、キッチンペーパーで作るマスク、ゴミ袋で作るポンチョ
- ・防災リュックに何を詰める？：防災グッズを複数ならべて30秒以内に必要なものを厳選して防災リュックの中に詰め込んでいく体験

②消防局ブースの運営サポート（ちびっこ消防士体験、水消火器体験、煙体験ブースの運営補助）

3. 参加者の声・得られた効果など

【ボランティア参加者の声】

- ・防災工作の担当で、災害の時に役立つものを子どもたちに教えることができ自分自身もすごくためになったと思った。
- ・ボランティア参加しながら空いている時間にスタディツアーの展示を見たり、消火器の体験や防災に詳しい方からお話を聞けて、良い経験ができたと思います。
- ・滋賀県に多くの活断層があることを初めて知った。紙やビニール袋で皿やレインコートを作ることができるので、実践してみようと思った。

【ボランティア参加者へのアンケート】

Google フォームでボランティア参加者に活動した満足度について5段階評価のアンケートを取ったところ、回答者の約90%から5の評価を頂いた。

また、「防災・減災について学ぶことができたか」という質問には、回答者の全員が「できた」とのことだった。



4. 学んだこと・今後の課題

- ・企画メンバーが決まってすぐに役割分担を明確にしたため、一人に負担が集中することがなかったように思う。
- ・展示物に書かれている漢字が分からないという子どももいたため、フリガナを振っていればより分

- かりやすい展示物となったのではないかと思います。
- ・防災工作については作り方を担当学生に伝えるのが直前になり、苦勞を掛けてしまった。また、工作によっては文字だけの説明となってしまう分りにくいとの声もあったため、図などもしっかり準備すべきであった。
 - ・防災リュックのルールに不備があり、前日にルール改正を行なうといったこともあった。このようなことがあったため、文字で共有するだけでなく対面でしっかりリハーサルしておくべきだった。
 - ・時間があるときにボランティア参加者にも様々なブースを回ってもらう時間を作ることで、学生側にもしっかり防災について学んでもらえた。
 - ・来場者向けのスタンプラリーで龍大ブースの中ではスタンプ対象が防災工作だけだったため、来場者が工作に集中してしまいうまく他のブースに誘導することができなかった。

- ・防災工作や防災リュックは来場者にシールを貼ってもらうことで人数をカウントできたが、展示はどのようにカウントするかを考えておく必要があった。
- ・趣旨は防災減災の意識を高めることなので、それを今後どのように広められるかが一つ課題であると感じた。



〈報告者：細見 恭大〉

事業名	『ボラゴン特集号』			
日時	2023年2月～2024年3月			
企画メンバー (学生スタッフ)	井関萌乃 (文学4)	岡 智浩 (文学4)	喜多真央 (文学4)	崇田ゆきの (文学4)
	千葉圭喜 (文学4)	大原健太郎 (経営4)	松本航紀 (経営4)	伊野涼雅 (政策4)
	松本裕生 (政策4)	鄭 叡智 (国際4)	太田早紀 (経営3)	八田知紗 (経営3)
	平川育海 (政策1)	田中あかり (心理1)		

1. 経緯・目的

ボランティア・NPO 活動センター深草（以下、ボラセン）では、龍谷大学の学生や教職員にボラセンの活動を認知してもらう目的で、『ボラゴン』や『ボラセンタイムズ』の発行、SNS での情報発信に取り組んでいる。

そのうち『ボラゴン』は、学生自らが関心を寄せる社会問題や、実際に取り組んでいるボランティア活動について、学生スタッフならではの視点で調査・分析し、学生や教職員など読者に向けて、知る機会を提供したり、活動への参加を促したりすることに重きを置いている。

しかし現在の『ボラゴン』は、ボラセンの認知度向上を意識するあまり、センター内の取り組み（＝学生スタッフ活動）を紹介する内容が多く占めており、従来のような社会問題やボランティア活動に関

して学生スタッフが自発的に調査・取材する内容が年々少なくなっている。本来、学生スタッフの広報で求められているのは、学生スタッフ活動の紹介やセンターの認知度向上ではなく、ボランティアコーディネーションのほうである。

こうした現状を踏まえ、かつての面白くてワクワクするような広報に再起するための取り組みとして、今回の『ボラゴン特集号』を企画提案した。

『ボラゴン特集号』の目的は以下の2点である。

- (1) ボランティアコーディネーションとしての広報誌作成
- (2) 学スタ活動・広報活動を見直す機会の創出

2. 概要

4回生の企画メンバー中心に話し合い、社会課題やボランティア活動に関するテーマ【伝統（藤森神社）】【食品ロス】【環境（京都風緑）】を選定した。

この企画を4回生中心で企画を完結させるのではなく、他回生とも協働するために、学スタMTで10年以上の歴史がある『ボラゴン』の昔と今を比較し、記事の変遷や「どんな内容を取り上げたら広報誌を沢山の人のに見てもらえるか」等のワークで意見交換を行なった。また、夏研修では活動の趣旨目的「広報誌を通して何を成し遂げたいのか」と、その達成に向けた合意形成の大切さを考えるワークを実施し、制作した。

①【伝統（藤森神社）】担当：井関・喜多・崇田・平川

----- 選定理由 -----

藤森神社は龍谷大学や深草ボラセンともつながりがある身近な存在だが、学生や教職員の多くは藤森神社が抱える問題についてあまり知らないのではないかと考えた。

----- 到達目標 -----

龍谷大学と身近な関係にある藤森神社について、「伝統文化の継承及び保護」に関する問題とその課題を読者へ伝える。合わせて、読者が藤森神社に関心をもち実際に現地を訪れるようになる等々、問題解決に向けた取り組みを促進する目的で、藤森神社の活動やその魅力を紹介する。

----- 記事の構成 -----

藤森神社の伝統と継承
 駆馬神事の紹介
 藤森神社の見どころ紹介
 深草ふれあいプラザ

②【食品ロス】担当：千葉・松本（航）・太田・八田・田中

----- 選定理由 -----

近年、世界では飢餓に陥る地域が増加している一方で、飽食により生産された食品が食べられることなく破棄されてしまう「フードロス」が問題視されている。深草ボラセン内においてもこの問題への関心が高く、学生スタッフとして何か行動ができないかと考えた。

----- 到達目標 -----

一人でも多くの人にフードロスへの興味関心を持ってもらうことを目的として、フードロス削減を目指すSDGsのゴール「12 つくる責任・つかう責任」を達成するために企業が取り組んでいることを紹介する。またフードロス削減に向けて私たちができる取り組みやそれらをサポートする団体を知ってもら

うことで、他人事ではなく自分事として、読者に社会課題解決の一步を踏み出すきっかけを提供する。

----- 記事の構成 -----

「食品ロス」って？

「フードロス」に今日からできること！

セカンドハーベスト京都の取組み（食品の寄贈、お金の寄付）

③【環境（京都風緑）】担当：大原・伊野・松本（裕）・鄭

----- 選定理由 -----

京都伏見の丘陵地で農業を営む「京都風緑（以下、風緑）」には多くのボランティアが集っている。『なぜ風緑に多くの人が集まるのか』という理由を追求することが、ボランティアの魅力を伝えることにつながり、ボランティア活動の促進に寄与するのではないかと考えた。

----- 到達目標 -----

自然本来の在り方を大事にしながら、真摯に農業と向き合う風緑ならではの「持続可能な農業の面白さ」を紹介する。そのうえで、風緑の活動に参加するボランティアたちと団体との関係性に着目し、風緑の魅力や、ボランティアを募る側（風緑）の想いを掘り下げることで、たくさんの気づきや体験が詰まっている「ボランティア活動の魅力」を読者に知ってもらう。

----- 記事の構成 -----

京都風緑の循環型農業
 今後の展望（養蜂の取組み、真竹事業の展開）
 京都風緑とボランティア
 ボラ参加者に聞いてみた！「京都風緑への思い」
 京都風緑の代表者が語る「ボランティアへの思い」
 京都風緑の農園紹介

3. 参加者の声・得られた効果など

○読者アンケート 期間：2月13日～3月2日

- ・神社の維持が祭や文化財などを守ることにつながるという話が印象に残った。
- ・ボランティアを通して得られた達成感や発見がとても伝わってきた。
- ・ボランティアに参加することはあったが、伏見の土地の性質や循環型農業としての側面があったことは知らなかったし、新たな気づきとなった。

○企画メンバー振り返りアンケート

- ・インタビューをすることが楽しかった。ボランティアしながらインタビューすれば、もっとよ

かったと思う。

- ・『ボラゴン特集号』の制作をとおして、学生スタッフの広報活動のあり方を見直す機会を作れたのはよかった。
- ・ミーティング外での情報共有が少なく、ほかのグループの制作状況が把握しづらかったのが少々やりづらさを覚えた。Canvaのコメント機能など、もっと活用していくべきだった。

○学生スタッフ活動・広報活動を見直す機会の創出
 広報誌制作の意義について考えるワークを2回実施した。そこで話された意見内容を比べると社会問題に対する意識が少し見受けられるようになり、「ボランティアへの一歩を後押しできるように体験談を交えながら複数ジャンル紹介する」「地元の人たちや他大学の学生とつながれるメリットを伝える」「ボランティア活動の背景にある社会問題について取り上げる」「2回目のボランティアに行く人を増やすために体験談（やる前とやった後の違い）をレポートする」等々、学生のニーズや団体の声に主眼を置いたアイデアが多数見受けられ、コーデの一環として取り組む広報活動の可能性に気づいてもらえたと思う。

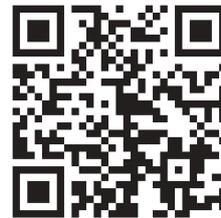
4. 学んだこと・今後の課題

企画の立案から冊子の印刷までに約12か月という制作期間を費やすこととなった。これは就職活動と重なる4回生主体で企画立案したことや、夏研修ワークを含む他学生スタッフへの働きかけを並行していたからだ。時間はかかったが、記事のテーマ選定から実際の記事制作・調査・執筆のほか研修やワーク準備に至るまで、各々が忙しいときでも互いに支え合いながら、先々のことも念頭に入れつつ、丁寧に打ち合わせを重ね続け、無事に完成した『ボラゴン特集号』は、満足のいく広報誌になった。

改めて自分達の広報活動の課題を考えると、それは学生スタッフ全体での協働意識の希薄さだと考える。たとえば、広報誌『ボラゴン』は主に広報班が中心となって制作・発行しているが、本来は班活動の範疇に留まらず、学生スタッフ全体で取り組むべきなのではないかを感じる。広報班がイニシアティブを発揮し、他学スタの要望を取り入れながら記事の内容をワーク形式で考えたり、学生スタッフ企画のコア募集のように一緒に企画・記事づくりを試してみたりするのはどうだろうか。そのほうが経緯目的で問題提起した内容の偏りも是正できるだろうし、かつてのボラゴン…学生らしさがあって、ちょっとカオスだが読み応えのある広報誌…の面白さに近づくのではないかと思う。

最後にこの企画の経緯について、「コロナ禍で集まりにくかった4回生で、卒業する前に何か一つ企画をしてみたい」という想いのもと、昨年の春休みからみんなでアイデアを出し合い、最終的にたどり着いた案が『ボラゴン特集号』であった。そのため「4回生企画」と見出しに付いている。もし『ボラゴン特集号』の想いを引き継いでくれる人がいるなら、回生や班の垣根を飛び越えて、もっと学生スタッフミーティングやボラセン会議、研修などで議論を交わしながら自由に取り組んでももらいたいと思っている。

ボラゴン特集号のリンクはこちら↓



〈報告者：岡 智浩〉

事業名	コミュニティ班復活計画～復活のC～				
場所	龍谷大学瀬田キャンパス				
参加人数	8名				
企画メンバー (学生スタッフ)	白川ひかる (社会2)	成川雅妃 (社会3)	丸山汰一 (農学3)	蔵本千優 (社会2)	
	土屋朝揮 (農学2)	堀内 薫 (社会1)	造田睦己 (先理1)	西垣風太 (先理1)	

1. 経緯・目的

コミュニティ班は「学内サークルを含めた龍大生が地域とつながるために積極的に働きかける活動」を行っていたが、コロナの影響で活動の方針が定まらず、2022年度に休止した。

今年度はコロナの制限もなくなり自由に活動ができるようになったため、積極的に一般学生や地域とのつながりを作る活動をしたいという思いから、コミュニティ班を復活させようという声が上がった。そこで、今年度は班として復活させるための土台作りとして活動を行なった。

2. 概要

1) 出張ボラセン

日程：7月14日（金）、18日（火）

内容：昼休みに、食堂前で、一般学生に向けて様々な分野のおすすめボランティアを紹介するブースを出した。

2) 学内サークルとのつながりを増やす活動

①サークル等への働きかけ

日程：龍谷祭を中心に、随時実施

内容：龍谷祭などを活用し、サークルに対してセンターや学生スタッフのことを広報し、連絡先を交換してつながった。

つながりをもったサークル等：8団体

(HORIZON、IVUSA、写真サークル、写真部、華舞龍、ソングバード、劇団かるがも、社会学部学会)

3) 学内サークルに対してのボランティア紹介等

日程：随時

内容：地域からのサークルの出演依頼や通年募集されているボランティア情報を、活動内容からマッチしそうなサークルに紹介した。

① 第1回サマースポーツフェス in 瀬田東の紹介(→華舞龍:イベントと重なっており活動につながらなかった)

② 地域の保育所である夏祭りの紹介(→ソングバード:サークル内での出演希望者がおらず活動につながらなかった)

③ シャボン玉飛ばし隊の紹介(→写真サークル、写真部:忙しい等で活動につながらなかった)

4) 学内サークルとの交流

①手話サークルとの交流

日程：9月8日（金）を予定していたが中止

内容：手話サークルとの交流会を企画し、7月中旬から打ち合わせを始めたが、手話サークルの参加人数が少なかったため中止となった。

②社会学部学会との交流

日程：12月17日

内容：社会学部学会が企画した瀬田クリスマス会について、「ポッチャブースをやりたいが企画メンバーにポッチャ経験者がいない」という相談を受け、イベントまでにポッチャ体験会を企画することにした。

5) 地域とつながる活動

①ポッチャ体験会

日程：A. 6月29日（木）、B. 12月8日（金）

内容：Fortis 滋賀の選手の方に来ていただいてポッチャについての説明と体験会を行なった。3)のサークルにも体験会の案内を行なった。

参加人数：A. 1名、B. 5名

※一般学生の人数

②NPO 法人りあんフリースペース「こて」の活性化ワークショップへの参加

日程：11月10日（金）、11月25日（土）

内容：センターの登録団体であるNPO 法人りあんが運営するフリースペースの活用について考えるワークショップへの参加募集があり、参加した。法人の職員や利用者、学生が「こて」の利用について意見を出し合い、学生ができること・やりたいことから考え、実際に実践してみようと取り組んだ。



3. 参加者の声・得られた効果など

1) 出張ボラセン

食堂前にブースを出し、チラシ配りなどを行なったが、ブースまで足を運んでくれる人はほとんどいなかった。しかし、来室者を待つだけではなく、こちらから働きかける活動にはなった。

2) 学内サークルとつながりをつくる活動

8団体と連絡先を交換することができた。関係性はまだ十分に構築できていないが、ポッチャ体験会や学生スタッフ企画などをサークルに直接案内する等の働きかけはできた。

3) 学内サークルに対してのボランティア紹介

サークルに対してボランティアを紹介することはできたが、ボランティア先とサークル側の都合が合わず活動にはつながらなかった。地域から学生が求められているということを知ってもらう機会にはなったと思う。

4) 学内サークルとの交流

残念ながら手話サークルとの交流会は中止となり、サークルメンバーに直接ボランティアの紹介をする機会や手話を教えてもらいコミュニケーションを広げるという機会がなくなってしまった。

また、社会学部学会の相談に対して準備したポッチャ体験会だったが、社会学部学会のメンバーの参加を得られなかった。しかし、社会学部学会のイベント当日は、多くの学生スタッフがボランティア参加しており、ポッチャ経験者がその運営をサポートすることができた。この一連を通して、社会学部学会とはつながりを作ることができたと考える。

5) 地域とつながる活動

ポッチャ体験会には一般学生の参加は少なかったが、参加した複数の学生スタッフをポッチャチームへのボランティアにつなげることができた。

ワークショップへの参加は、もともと予定していなかったが、ポッチャ以外にも地域とのつながりを

持ちたいという思いから参加した。普段関わることが少ない障がいを持った方と共に意見を出し合うことができ自分たち自身も貴重な体験になった。また、地域に学生が活用できそうな拠点があるということを知ることができた。

4. 学んだこと・今後の課題

1) 出張ボラセン

食堂前にブースを設置したが、ブースまで足を運んでくれる人はほとんどおらず集客の難しさを学んだ。気軽に相談しやすいブースや機会の創出などについて改めて考え直していかなければならない。



2) 学内サークルとのつながりを増やす活動

サークル等のグループへの具体的なボランティア紹介は、ニーズが合えば活動への参加を促しやすかったり、学生企画の案内にも目を傾けてくれやすかったりするのではないかと考えているため、他にもつながることのできるサークルがあれば増やしていきたい。

3) 学内サークルに対してのボランティア紹介

学内サークルがボランティア参加につながらなかったことには、日程の都合がつかなかったものもあるが、ボランティアへの関心の低さやサークルの活動方針の違いなど様々な原因でつながらなかったと考えられる。そのため、どのようにボランティアに関心を持ってもらうかについて模索し、各サークルに応じた紹介ができるようより密な関係を築いていくことが今後の課題である。

4) 学内サークルとの交流会

手話サークルとの交流会開催は中止となったが、学内サークルとボランティアや地域とをつなぐために各サークルの取り組みや意向について理解を深めていきたい。そのために、来年度はお互いの活動の理解を深めるとともに、直接ボランティアを紹介する場として他のサークルとも交流会を開催したい。

5) 地域とつながる活動

ポッチャ体験会は、ポッチャについて学ぶ機会でもあり、ポッチャを広める機会にもなったと感じている。ポッチャに限らず、学内で体験できる機会をもつことで、その活動の魅力について直接伝えられる場になるのではないかと考えている。そのため、他の体験会の開催にも力を入れていきたい。

また、ワークショップの参加についても学内サークルと地域をつなげるための土台作りになると実感しているため、機会があればまた参加したいし、そういった情報に敏感になっていきたい。特に今回参加して知った「こて」を活用して学生と地域をつなげていきたい。

来年度も復活のCの活動は班としてではなく、

企画として続けていく。なぜならば、待ちの姿勢となっているセンターにおいて復活のCで行なってきた活動は意味のある事だと感じるが、定期的な活動が定まっていないため、班として活動するにはまだ不十分である。加えて、2025年度社会学部移転に伴い、現状で新たに班をつくるのが移転の際の負担につながると感じている。また、これまでの活動に加えて来年度は、2025年度の移転を見据えて活動をどのように引き継いでいくかを調整していきたい。

〈報告者：白川 ひかる〉

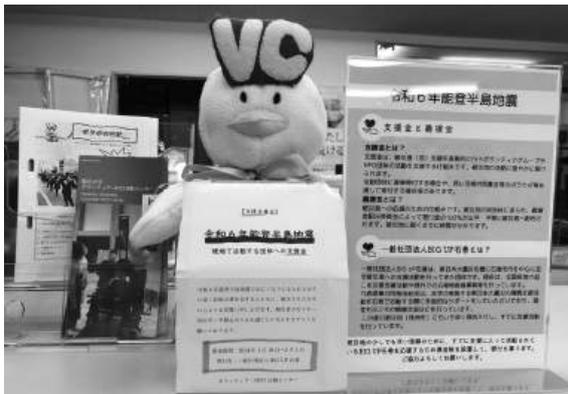
事業名	令和6年能登半島地震支援金募金
実施日・場所	2024年1月10日（水）～2月2日（金） 深草キャンパス：成就館1F ボランティア・NPO 活動センター内 瀬田キャンパス：青志館（生協食堂）隣 ボランティア・NPO 活動センター内

1. 経緯・目的

2024年1月1日に発生した令和6年能登半島地震の一報を受け、早急にできる被災地支援の一環として、深草・瀬田のセンター内に「支援金」の募金箱を設置することにしました。

被災地域の状況を鑑みて検討した結果、東日本大震災の復興支援活動を通じて、以前よりご縁があり、いち早く現場に赴いて活動を始めていた一般社団法人BIGUP 石巻に「支援金」として募金を実施することにいたしました。

※「支援金」とは、被災者（地）支援を直接的に行なうボランティアグループやNPO団体の活動を支援する仕組みです。被災地の活動に速やかに届けられます。



2. 概要

(1) 募金箱設置期間

2024年1月10日（水）～2月2日（金）
※土日祝を除く9：00～17：00

(2) 支援金の届け先

一般社団法人 BIG UP 石巻

東日本大震災を機に石巻市釜・大街道地区を中心に在宅被災者への支援活動を行なっている団体。地元、石巻で人が集うことで様々な情報と人が出会うためのこのコミュニティスペース作りや、子ども食堂事業などを展開しながら、人の心の復興と街の復興につながる活動を展開しています。現在の主な事業内容としては、①地域づくり、②子ども支援、③災害支援で、令和6年能登半島地震では、発災直後から石川県珠洲市を中心に活動されています。

3. 参加者の声・得られた効果など

募金総額：93,600円

この募金活動は、令和6年能登半島地震発災の一報を受け、「すぐに始めることのできる支援活動」として取り組みを開始しました。

冬期一斉休暇終了後すぐに活動を開始ということ

もあり、告知期間が短く、どの程度協力を得ることができるのか心配していましたが、杞憂に終わりました。個別に来室して募金協力をしてくれる学生・教職員以外にも、龍谷大学コミュニティメディア政策企画が「ラジオ下神白上映会」時に募金の呼びかけをしてくれたり、龍谷大学 B.W.Broadway Musical Circle の OB・OG 会が OB・OG の公演会

の時に募金呼びかけを申し出てくれるなど、たくさんの協力を得ることが出来ました。ご協力ありがとうございました。

報告者：竹田 純子

(深草キャンパス コーディネーター)

事業名	災害ボランティア講座
実施日	2024年1月19日(金) 12時40分～13時20分
実施方法	オンライン (Zoom)
参加人数	92名 (運営スタッフ含む)

1. 経緯・目的

令和6年能登半島地震の被災地では刻々と状況が変化し、それに伴って被災地に関する情報も変化していきます。ボランティア・NPO活動センターでは、これまで多くの被災地での活動を行ってきた実績があり、災害ボランティアに関する情報提供も行なっています。

については「被災地のために何かしたい」と考えている本学学生・教職員に向け、災害ボランティア講座を開催しました。

2. 概要

竹田コーディネーターより、以下の説明を行ないました。

- ① 令和6年 能登半島地震の概要
- ② 災害支援のボランティアって何だろう？
- ③ 災害ボランティアの歴史
- ④ 被災地域でのボランティアを始める前に
- ⑤ 活動の際に気をつけて欲しいこと
- ⑥ 龍谷大学の今までの取り組み／今回の学内の動きなど



3. 参加者の声・得られた効果など

- ・単に災害ボランティアといっても現地に行くことだけが支援ではないし、自分たちにもすぐできる支援の仕方もあることが分かった。
- ・災害ボランティアについて知らなかったことや今の能登半島の状況など、これからボランティアに行く前に考えておくことなどを知ることができました。
- ・泥を見るのではなく人を見る、災害ボランティアに望む人たちの基本的な心構えを聞いて感動しました。ますますボランティアに取り組みたいという思いが強まりました。
- ・災害ボランティアの歴史やすべきこと、注意する点だけでなく、その後のケアについて知ることができました。

- ・ボランティアする自分を想像できても、される側のことをどれだけ考えるかが大事だということがよく分かりました。私たちと現地の人とにギャップがあるのもよく分かったので石川などについてよく調べようと思いました。
- ・実際に現地に行くということをしたと、今回の講座を聞いて改めて思いました。ただ「行きたい」というだけでなく、今回の講座の中で学んだことをもとに、冷静な心の状態を心がけて必要なところに必要な支援を届けに行けたらいいなと思いました。実際に行くだけでなく、自分が今回のことも含め、持っている知識を身近な人に伝えることもします。

4. コーディネーター所感

短期間の広報でどれだけの人が反応してくれるのかが心配ではありましたが、大勢の反応があり、嬉しい驚きでした。

被災地域の現状は刻々と変化しているので、具体的な活動先を紹介できないのはもどかしいところでありましたが、絶対に分かっている欲しいポイントは最低限伝えることができたのではないかと考えています。

今後、センターとして現地状況に鑑みながらそのフェーズにあった活動を随時迅速に提供すると共に、学生の声を集める体制を取れるように努めたいと思います。

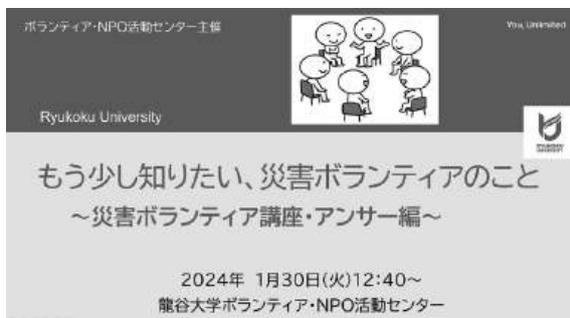
〈報告者：竹田 純子

(深草キャンパス コーディネーター)〉

事業名	災害ボランティア講座アンサー編『もう少し知りたい、災害ボランティアのこと』
実施日	2024年1月30日(火)12時40分～13時20分
実施方法	オンライン (Zoom)
参加人数	24名 (運営スタッフ含む)

1. 経緯・目的

1月19日に開催した『災害ボランティア講座』には多くの参加者があり、アンケートでも多くの質問が寄せられました。そこで、関心層の知りたい！に答え、一緒に考える会を“災害ボランティア講座アンサー編”として開催しました。



2. 概要

前回の講座に寄せられた質問内容を基に、以下の流れで竹田コーディネーターより回答と補足説明などを行ないました。

- ① 現在の被災地の様子
- ② これまでの龍谷大学の取組み（東日本大震災時などの活動事例）
- ③ 活動時のコミュニケーション
- ④ 自分達にできること
- ⑤ 龍谷大学としての動き、その他の情報など

3. 参加者の声・得られた効果

リアルタイムで以下のような質問があり、それぞれに回答しました。

- Q1. 地域の特産品を買う際に直接現地に行く以外にも、おすすめの場所はありますか。
- A1. アンテナショップを探したり、デパートでの物産展など様々な催しが行なわれると思うので、ぜひSNSやWEBなどで探してみてください。
- Q2. ボランティア活動の活動費用は出していただけますか。
- A2. 龍谷大学が今までにバスを出して被災地へ行った際には、大学からの補助や教職員からの寄付などにより、参加費をできるだけ安く設定

して学内で活動希望者を募集するといったことはしましたが、全ての活動費用を大学が負担するといったことはしていません。

Q3. 今年の卒業式で募金活動はされますか？その場合、学生ボランティアは募集されるのでしょうか。

A3. 現在センターでは支援金の募金箱を設置しています。また、卒業式に募金活動をしたいという人がいたらぜひセンターへご相談ください。募金活動をセンターと一緒に実施することになったら、ボランティアも募集します。

また、参加者アンケートでは以下のような声が得られました。

- ・私は災害ボランティア講座には参加できなかったが、今回のアンサー会を通じてメディアでは分からなかったボランティアの意義や様々な被害状況を知ることができた。また、今後石川県は観光シーズンになっていくと思うので、人々は観光地での消費活動が重要になっていくと感じた。(政策1)
- ・自分にできることを日頃から考えることを習慣にしたいと思いました。まずは、今回の地震に関心を持ち続けることから始めたいと思います。(農

学1)

- ・ボランティアと聞くと力仕事で、なおかつ神経を使うものが多いと思っていたけれど、そうでなくて、自分にできることを少しずつやっていくのも十分力になっているのだと分かった。
- ・本日の講座を聞いて、ボランティアに行くことも大切だけどボランティアに行かずとも被災地を支援できるとわかった。しっかり状況を判断しながら災害ボランティアに参加したいと思った。

4. コーディネーター所感

今回は、学生ボランティアの力が発揮できるまでもう少し時間が必要なことを踏まえ、一時の興味ではなく、「関心を持ち続けるため」を念頭に置きながら話しました。しかし、現時点で不確定要素が多く、「これをしよう！」という発信ができなかったことをもどかしく感じました。学生の反応もアンケート以外では分からないので、学生の反応を見ながら対面で語り合える場が必要だと感じました。

〈報告者：竹田 純子

(深草キャンパス コーディネーター)〉

事業名	有志学生による卒業式での募金活動
実施日・場所	深草：2024年3月14日（木）・深草キャンパス 瀬田：2024年3月15日（金）・滋賀ダイハツアリーナ（卒業式会場）
参加人数	深草：28名（うち、学生スタッフ27名） 瀬田：9名（うち、学生スタッフ8名）

1. 経緯・目的

ボランティア・NPO活動センターでは過去の大規模災害発生時に、学生からの「募金活動がしたい」という声を受け、そのサポートをしてきました。今回の令和6年能登半島地震の発生を受け、学生スタッフ有志から、「卒業式において募金活動を行いたい」という相談があり、深草と瀬田の各卒業式の日には募金を呼び掛けることになりました。

また、学生スタッフ以外にも広く龍大生に募金活動への参加を呼びかけることで、被災地での災害ボランティア活動以外にもできることがあると発信することも目指しました。

2. 概要

(1) 深草

活動日時：3月14日（木）

① 8：00～ ② 12：30～ ③ 15：30～

※各回とも活動は1時間程度

活動場所：

深草キャンパス内（卒業式会場はみやこメッセ）

参加方法：

キャンパス内での実施につき事前申込は不要として学生スタッフのinstagramで広報し、当日も実施の際にSNSを通じて呼びかけることにしました。



(2) 瀬田

活動日時：3月15日（金）9：00～10：30

※卒業式開始までの時間で活動

活動場所：滋賀ダイハツアリーナ（卒業式会場）



参加方法：

学外での実施につきボランティア保険をかけるため、Google フォームでの事前申込制としました。また、卒業式当日用の手持ち看板等の制作を3/11

(月)に行ない、その参加も併せて Google フォームで回答してもらいました。

3. 参加者の声・得られた効果など

募金総額：81,787円

募金の届け先：中央共同募金会の支援金や義援金
募金活動参加者からは、以下のような感想がありました。

- ・現地に赴いてボランティア活動をすることが厳しい中、募金という形であれば被災した方々を少しでも助けることができると思い参加しました。たくさんの方々に募金へ協力いただいて、感謝の気持ちでいっぱいです。
- ・私自身、募金活動をしたのは初めてでしたが、被災地に少しでも力になれるならと思い参加しました。最初は足を止めてくれる人が少なかったですが、後半は他のグループと一緒に声かけをより多くかけ、立ち止まってくれる人が増えて嬉しかったです。今回参加して、募金を呼びかけるのは難しいことだけど、少しずつの力でも集まると大きな力になるんだなと感じました。
- ・募金いただいた方から、「ご苦労さま」「頑張ってくださいね」など、声をかけていただいて励みになりました。

報告者：ヒギンズ 尚美

(瀬田キャンパス コーディネーター)